

「いびつ」絵コンテ					
カット	イメージ映像	映像内容	アクション・カット	BGM	シーン
1		自分の暗い部屋で紙に円を描いている。	手元のカットからスタート	ユルッとした情性かつ満たされた日常を表現できるようなBGMでスタート	北関東から上京してきた主人公A(23歳男性)
2		円は完成された姿であるが故に美しく見え、満足げに何重にもその円を重ね書きするA	頭越しの絵	↓	コンパスで描いている様子
3		昔からこの習慣を続けているのか、部屋にはいくつもの円が書いてある紙が落ちていた。	顔アップ	↓	タイトル表示 「いびつ」
4		出勤中のA。		↓	ロケーション・住宅街
4		いつもの風景、いつもの日常。 道を人に聞いている外国人。		↓	テンポ良く切り替えていく。

6		上司がプロジェクトの仕切りをしている中、静かにその場をやり過ごす。 同年の男同期Bは積極的に発言。		↓	※シーンオフィス
7		昼休みに、いつものように安い定食を注文する。		↓	※シーン食堂
8		一緒にご飯を食べる男同期CがBのアグレッシブさに対して皮肉を話しかけてくる。		↓	※シーン食堂
9		(小さなキャンパスに小さな円が書かれている紙のインサート)		↓	※シーン食堂
10		Cの自分と変わらないくらい安い定食を見ながら、 AにはCが自分よりも小さな円に見えて少し微笑んだ		↓	※シーン食堂
11		LINEの通知が来て、開くと地元の友達からの誘い 「いつものメンバーで飲むから週末こっち帰ってこいよ」	家のシーン 漫画が何か読んでいる 手元アップのシーンもいれる	↓	※シーン 夜

12		地元へ帰省して飲み会に参加する。 地元の友人はラフな格好でいつものコミュニティでいつものような車や地元コミュニティの話をしている。		↓	※シーン 居酒屋
13		「その話もう100回目だっー」そんな風に馬鹿笑いする友人たち。		↓	※シーン 居酒屋
14		そんな友人たちを見つめるA		↓	※シーン 居酒屋
15		同じように県外にでているオフィスカジュアルの女友達Dが冷めた目で 「はあ」とボソッと呟き、 「こいつらいつも幸せそうで羨ましいよね」と話しかけてくる。		↓	※シーン 居酒屋
16		その言葉がどこか自分の中に引っかかるA。		この辺からBGMを無音に 何かモヤッとしたものを 表現させるSE	※シーン 居酒屋
17		暗い部屋でまた紙にコンパスで円を描く		静かなBGM	※シーン 自宅

18		今日は少し大きな円を描いてみようコンパスを大きく広げると重心がずれ、いびつな線が入り、紙からはみ出してしまう。		どんどん大きくなる	
19		次第に笑顔を浮かべ、何かを悟ったような顔になる。		大きくなる	この辺からBGMはアップテンポに。
20		そこからAはプロジェクトに積極的に参加したり		ここからアップテンポ	※シーンオフィス
21		外国人に道を片言で教えている		アップテンポ	
22		どんどん大きくいびつな螺旋を描いていく		↓	インサート
23		少し高い定食を挑戦してみる - 自分が想像しうる限りの日常での情報を取り尽くしていく。		↓	※シーン食堂

24		Aは自分への自信からか、奇妙な微笑みが絶えなくなっていた。		↓	
25		そんなある日、1人の女性と街中で遭遇する。		無音に	
26		それでもどこか不思議な風態をしたその女性は、Aと目が合って少し戸惑いながらも小さく微笑んだ。		無音に	
27		誰かが手書きでいろんな色の螺旋を描いている		無音に近いBGM	※シーン空想世界
28		引いて見ると、それは街中で遭遇した女性で、どんどん引いていくと、そこはキャンパスという概念の無い、限りなく広大な空間だった			空想世界とわかる演出をいれる
29		Aの奇妙な微笑みが顔から消える			街中のシーンに戻る タイトル表示「いびつ」 FIN

【動画の解説】
 作中でのキャンパスの大きさはモノの見方の広さを表し、線は探究の軌跡、円の大きさは体験や情報の量を表している。
 人はモノの見方を広げていくことで自分のキャンパスを大きくしていき、キャンパスの余白を埋めるために体験などの情報を取得していく。

心の豊さは、常に自分のキャンパスを大きくし続けながら、余白を埋める為に螺旋を描くように自分の円(体験などの情報量)を大きくしていく、つまりは未知の体験の余白を実感しながら、まだ見ぬ余白を探究し続けるということそれ自体であると考える。

※ 幸せという状態は、キャンパスの大小に関わらず、その余白がなくなるくらい大きな円を描き切った状態のことで、作中の冒頭での主人公と地元の友達などはある種幸せだが心は豊かでは無いという状態になる。

作中に登場するAは、自分の余白に気がつき、螺旋を大きくしていく(想像できる範疇の体験をしにい)くことにする。

まだ見ぬ自分と出会うことはとても刺激的であったが、それは同時に余白を少なくしていくことでもあった。肝心のキャンパスを大きくすることをしなかった為、いつの間にか元の円よりは少し大きいだけの円になっていた。

最後の女性の登場は、新しい価値観に出会うことを表している。それは自分が信じてきたものを壊されることにも近い衝撃である。

モノの見方を広げるという行為は必ずしも感動的、快楽的なモノではなく、モノの見方の広さに自信のある人間ほど、新しい価値観を受け入れるのは難しいモノであるが、それを許容し乗り越えて見方は広がっていく。